

■「量から質」が文章上達の近道

書くトレーニングで大切なことは、量のノルマを守ることである。

文章の質というのは、読書体験や人生経験、才能などを含めたその人の総合力にかかってくる。急には上げられないし、急には変えられない。質を上げてから量に向かうのではなく、量をこなすことで質を上げると考えよう。

本書では、とにかく量をこなす方法を推奨する。原稿用紙十枚を書くトレーニングを積んでいけば、文章の質は必ず向上する。量をこなしたほうが文章の質は早く上がっていく。

■まとまりのある文章にする

感じたことを気のきいた言葉にするのと、きちんとまとまりのある文章にするのでは、脳の働かせ方がまったく違うのだ。

気のきいたコピーならば、思いつきでもつくることができる。だが、テーマがあって、論旨のはっきりした文章を書くとなれば、何を書くか、文章をどう組み立てるか、どうすれば自分なりの角度ある見方を表現できるかと考えなくてはならない。

■主題を打ち出す

論理的な文章で、かつ生命力があふれている文章がある。それは、中身が個人的な体験だとか、客観的な内容だとかよりも、構築ができて文章であるかどうかで決まる。まず、読んだ側の「それで何なの？」という問いに答えられるかどうか、つまり主題をきちんと打ち出せているかどうかである。

■高姿勢な批評は読んでいてイライラする。安全地帯からの批評家の放言は読みたくもない。批評家といわれる

人たちの中には、作品をけなすことが仕事だと考えているのではないかと思われる人もいる。

彼らの多くは、人の作品について書くときにその作品に意味を見出さない。それどころか、けなして価値を下げるようなことばかりを書く。そんな批評を読んだら、読者はその作品を読む気などなくしてしまう。彼らは作品をけなすことで、「自分はこんなに見る目がある」「自分はこういう考えだ」といった自己主張をしているのだ。

それは「書く」という行為を根本的に間違えてとらえている。

作品を批評するとは、その作品とつながろうとしている読者に新たな出会いを提供することである。そこに批評を書く意味がある。

■うまいエッセイ

エッセイは作者が体験した日常的な出来事を題材にして書かれる。過ぎ去ってしまった出来事が、読んでいる人が、いま実際に自分が経験しているかと思えるほどリアリティのある形で書かれていたとしたら、それを読んだ人は、作者の体験を共有できる。うまいエッセイストとは、そういう書き方ができる人だ。

■文体」を身につける

他人がその文章を読んだときにおもしろいと感じさせる力、文章の魅力、個性などが、生命力だ。よい小説、エッセイには生命力がある。

この生命力は「文体」から生まれてくる。しっかりと構築された文章が書けるようになったら、次は文章に生命力を持たせる「文体」を身につける段階である。